



定期総会・懇親会開催

4月14日には、42名の出席者のもと定期総会と懇親会が行われました。また、懇親会には手稲区市民部長樺沢正史氏、手稲区連合町内会連絡協議会会長今枝健氏にもご出席をいただき、盛会裏に終わりました。

議事は、平成21年度の事業報告、収支決算報告、平成22年度の事業計画、役員選任などの案件が可決されました。ここでは、月例研究会の予定を記すこととし、その他については、「定期総会議案書」をご覧ください。

月例研究会予定

第51回	7 / 14	「西区の歴史」～手稲との関わりから～	琴似 渡辺滋氏
第52回	8 / 11	「樺太で終戦、シベリア抑留、引揚げ」～手稲音頭と共に～	西村巖氏
第53回	9 / 8	「札幌の市街地西部山麓にあった温泉」	地質研究所 所長 藤本和徳氏
第54回	10 / 13	「手稲村の農地改革」 「手稲の自然保護」	吉田寛義会員 伊澤敏幸会員
第55回	11 / 10	「手稲区誕生の頃を振り返って ～区制21年目の手稲～」	初代手稲区長 笥石雄氏
第56回	12 / 8	「昭和25年の雪像づくりから曙の彫刻《颯》」 「手稲区内の地域を生かした学校環境づくり」	造形作家 渡辺信氏 菅原直会員
第57回	1 / 12	「手稲金山の道庁公宅で過した思い出」 「新発寒のまちづくりの歩み」	元稲穂金山まちセン所長 丹羽紀美氏 佐々木光男・明井久嘉会員
第58回	2 / 9	「小説に見る手稲」 「石狩・手稲の交通網」	小田真二会員 釣本峰雄会員
第59回	3 / 9	「樺太の現成 ～気屯のトーチカなどを見て～」 「平成22年度を振り返って」～事業、予算、その他～	元小学校校長 一関庶路氏 事務局

《各回、2テーマずつ研究する予定ですが、未定のところがあります》

... ..

軽川光風館事件(2)

北海の海賊

その後、大正10年頃、沿海州アムール川周辺に海賊が出没するようになった。狙われるのはソ連の漁船、貨物船である。海賊はロシアの船を停船させるとロシアの船員を甲板に並べて日本刀で全員の首を刎ねた。そして積荷その他を奪い去ったのである。日本船に被害がないのでなかなか実情を掴むことが出来なかった。しかし数が重なるにつれて国際問題に発展して来たのである。

日本政府も放っておけなくなり調査を開始した。海賊は、汽船大輝丸740トンを探り軍人上がりの江連力一郎が頭目であった。江連力一郎は剣道五段、柔道五段、空手四段、その上ピストルの名手であった。江連が生死を誓い合った刎頸の友、松本源八郎が尼港事件で戦死していた。松本源八郎は奇襲攻撃を強行に反対したため卑怯者呼ばわりされ留守部隊に残されたのである。そして松本は居留民の身を案じ甘んじて、とらわれの身となった。皆殺しの悲運に見舞われた時も民間人の居留民を庇い、立派な最後であったという。

次回の予定

次回(6月9日)は、お2人の会員発表、高木秀子氏の「手稲に住んで25年～外から見た手稲～」と野村武雄氏の「新聞に見る大正・昭和頃の軽川」を予定しております。

江連はこのように立派な松本を殺したバルチザンに義憤を感じ、遂には暴徒の頭目となったのであった。

しかし政府の追及が厳しくなるにつれ、彼らは海上にいられなくなり陸に逃れた。遂には国定忠治ではないが、江連は仲間とも別れて散り散りとなり、逃れ逃れて北海の地、手稲に身を隠したのである。

軽川光風館

昔、手稲山の麓に軽川光風館という料亭旅館があった。春は桜の名所であり大変よい冷泉が湧き出していた。当時で百数十名の宿泊設備もあり、定山溪温泉が開発されていない当時としては、小樽、札幌の奥座敷として大変な賑わいを見せたものであった。

江連力一郎は愛人お梅と光風館に身を隠した。江連は毎朝散歩に出掛ける。和服に雪駄ばきで山道 6 キロを歩き、山奥の桜の木に向かってピストル十発を試射するのが日課であった。距離 15 メートル、この桜の木にいつしか深い穴が出来たのであるが、この穴は一点であったという。昭和末期までこの桜の大木は残っていたそうであるが、近年の都市化の波で切り倒されたとのこと、誠に残念なことである。

身を隠して 1 ヶ月余り、朝は羽織姿で散歩、夜は朗々と詩吟を吟じていたのでは、身を隠していることにはならない。田舎町では俺はここにいるぞと宣伝をしているようなものである。遂に官憲の知るところとなり、ある晩、光風館は警官の大口囲網に包まれた。

地元の消防団員から青年団を動員した包囲網は二重、三重と光風館を取り巻いた。正に蟻の這い出る隙間もないとは全くこのことである。この気配を察した江連は、愛人お梅を先に逃した。官憲が部屋に踏み込んだ時はすでに藻抜きの殻であった。

岩田総一郎警部

江連力一郎は十重、二十重の包囲をどうかわしたのか、和服姿でユウユウと山を下っていったのである。部屋に残っていた茶碗のお茶はまだ温かったという。まだ遠くへは逃れていない筈である。官憲はすぐ後を追った。

彼は大島紬の和服に雪駄ばきで懐手をして軽川沿いの道を手稲駅へ向かっていた。恐らく懐の中の手にはピストルが握られているに違いない。官憲は彼の姿を発見したが遠巻きにして近づくことが出来ない、彼はユウユウと歩いてゆくと駅前の旅館に入った。

「おさわがせして申し訳ないが、水を一杯、馳走して頂きたい」

彼は逃げおおすことは出来ない観念していた。官憲の近づくのを待って、頃合を計っていたのである。

女中が震える手でお盆に乗せて差し出すコップの水をうまそうに飲み干すと礼を言って玄関先へ出た。北海道の玄関先は雪の関係で道路より四、五段上がっている。江連力一郎は懐手をしたまま、遠巻きにしている警官の輪がじりじりと縮まって来るのを黙って見下ろしていた。

輪が十メートル位に縮まったとき、官憲の中より 1 人の男が歩み出てきた。この男は他の官憲を圧して堂々としていた。

「私は道警の警部、岩田総一郎と申します。失礼ですが江連力一郎は貴方ですね」

岩田総一郎は北海道では有名な警部であった。柔道五段、剣道三段、当時の段位は権威があった。恐らく江連とは対等の実力であったであろう。

暫く 2 人は相手の目を見つめ合った。英峰は黙してもお互いの腹を知るといふ。

江連はにっこり笑うと「ほう、貴方が岩田さんですか。貴方の名前はかねがね伺っております。お会いするのは初めてですが、私も貴方の手に掛かるのなら本望です」と言うと、江連は懐よりピストルを取り出して岩田警部に渡したのであった。

江連は後に裁判に掛けられて懲役 20 年の刑が確定するのであるが、勿論摸範囚の彼は幸運にも度重なる恩赦等にも恵まれ、5 年で刑期を終えて出所することになる。その後、請われて満州へ渡り、一生を満州開拓に尽くしたとのことである。

昭和 15 年、東京の柳橋より鄙びた田舎町の料亭「みどり」に移ってきた薄幸の芸者小春は、何と江連力一郎と愛人お梅との間に出来た娘であったことが小春の死後、手稲の料亭「みどり」のご当主萬田氏によって解明されたのである。

芸者の子は芸者、との封建思想が根強く残っていた昭和の初期の花柳界としては当然であったであろう。

(資料提供：立花顕次会員)

お知らせ

手稲鉱山研究部会は、研究報告書提出を一区切りとして、一旦、解散することとしました。長い間ご協力有り難うございました。

なお、今後は必要に応じて、少グループで集合することもあるので、その節はよろしく願います。

部会長 三國 勲